fuchu
Community Symphony Orchestra

府中市民交響楽団 第80回定期演奏会
市制施行65周年記念事業 第55回府中市民芸術文化祭参加公演

# 北の夜あけ 南の夕べ

無料公演

## 市民響×稲垣雅之

府中市民交響楽団

Masayuki Inagaki・指揮

ヴェルディ 歌劇「シチリア島の夕べの祈り」序曲
G.Verdi: *I Vespri Siciliani*

レスピーギ 交響詩「ローマの噴水」
O.Respighi: *Fontane Di Roma*

シベリウス 交響曲 第5番 変ホ長調 作品82
J.Sibelius: Symphony No.5 in E♭major Op.82

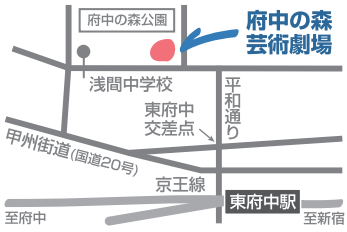
2019年
10月6日 日
13:30 開場／14:00 開演
14:00 start, Sunday, October 6th, 2019 at Fuchu-no-Mori Theater "Dream Hall"

## 府中の森芸術劇場 どりーむホール

全席自由 入場無料

＊小学校入学前のお子様のご入場はご遠慮下さい。
＊当団では点字チラシとプログラムをご用意しております。詳細はホームページをご覧下さい。

お問い合わせ：ハーモニージャパン 03-3409-3345 ／ 大橋康廣 042-368-6180 ／ info@fuchu-cso.org
主催：府中市・府中市芸術文化協会　主管：府中市民交響楽団 https://www.fuchu-cso.org/
協力：点訳ボランティアてまり



**イタリア**の作曲家・ヴェルディとレスピーギ、**フィンランド**の作曲家・シベリウス。今回は「温暖な地中海の国イタリア」と「冬の長い北欧フィンランド」、対照的な二つの国で生まれた音楽の対比をお楽しみいただくプログラムである。

**地中海・イタリア…** かの天才モーツァルトもメンデルスゾーンも少なからず影響を受けたこの国は、とにかくコントラストがはっきり。青！緑！黄！赤！といった原色が目に飛び込み、滑舌の良い言葉が飛び交い、ヨーロッパの中でも太陽の出ている時間が特に長い。ラテン系イメージの代表がまさにイタリア人だろう。女性とすれ違ったら声をかけないと失礼だし、フラれて泣いてもすぐ忘れ、逆に女性同士が大声で喧嘩している時はほぼ男性問題とか…
そんな国で生まれ育った**ヴェルディ**は数々のドラマチックなオペラ作品で有名だが、**『シチリア島の夕べの祈り（別名：シチリアの晩鐘）』**も全5幕のオペラである。処はシチリア島パレルモ、教会の晩鐘を合図に支配者フランス兵の虐殺が行われた事件を題材とし（詳細は省くが）木管によるヒロイン（エレーナ）の歌や、父と息子の再会場面のチェロ～ヴァイオリンの旋律は、なんとも美しい（はず）。祈りの時刻を知らせる鐘に合わせてシチリア住民が一斉に蜂起した、とされているが、このラテンの国では時間通りにきちんと鐘は鳴らない…という事を全くの余談ながら補足したい。
**レスピーギ**作曲**『ローマの噴水』**はその楽譜の序文によると「ローマの4つの噴水で、その特徴が周囲と最もよく調和している時刻、その美しさが最も印象深い時刻に注目して表現…」とある。**『夜明けのジュリアの谷の噴水』『朝のトリトンの噴水』『真昼のトレヴィの泉』『黄昏のメディチ荘の噴水』**4曲は1日の流れの如く、続けて演奏される。トレヴィの泉は観光で訪れた方も多いのではないだろうか。私が訪問したのは夜のライトアップ時であったが、ベストは真昼だったか…うーむ。

一方の**北欧・フィンランド…** 残念ながら北欧の国を訪れたことはないが、白夜のアラスカには滞在したことがある。子の刻になっても夕暮れのような明るさが続く短い夏。人々はそれを楽しんで踊り明かすというよりは、ヒタヒタと確実に迫ってくる暗く長い冬をただ静かにじっと待つ、そんな異様なパワーを感じた。そしてなにより、手つかずの大自然。雄大とはこういうことだったのかと考えさせられる神秘的な遠景はどこまでも広がっている。
**シベリウス**の交響曲はなかなか演奏される機会がないが、改めて聴いてみると本当に「美しい」と表現されるべき曲なのだと思う。**第５番**が作曲されたのはフィンランドがまだロシアの支配下にあり、シベリウス自身も大病を克服したばかりで、恐怖と不安の中にあった頃。しかしフィンランド政府がシベリウスの生誕50年を祝ってくれた行事で初演されたもので、他の交響曲に比べて晴れやかな印象もある。
冒頭は静かな山々の景色、鳥がさえずり、春の光が溢れる。と何やら胸騒ぎがして霧やもやの中から悲痛なメロディー。そこから徐々に狂喜のクライマックスへ向かっていく。2楽章もまた色々な風景をイメージできる曲だが、懐かしいようでいてどこか悲しげで物憂い。3楽章、延々と続く弦楽器のキザミは風の音だろうか。どこからともなく再び山々が現れる。そして遂に「ある日の朝、16羽の白鳥が頭上を旋回し…（中略）…銀のリボンのように消え去った…何という美しさ…人生で最も感動したことのひとつ…」と書き残されたその高貴なシーンがやってくる。最後の和音にたっぷりタメ（休符）が挟まれるのも、あの豊かすぎる大自然を思えば納得できるのである。

仲秋の府中の森で「北の夜あけ 南の夕べ」、ご来場お待ちしております。

デザイン：原田和香〈チェロ〉

指 揮 ● Masayuki Inagaki

# 稲垣雅之

愛知県出身。名古屋芸術大学卒業。
洗足学園音楽大学附属指揮研究所修了。
2006年、東京佼成ウインドオーケストラのオーディションに合格し、2年間指揮研究員として、ダグラス・ボストック、下野竜也、齊藤一郎、山下一史、渡邊一正、ポール・メイエ各氏等のアシスタントを務める他、第19回朝日作曲賞最終審査会、第1回全日本吹奏楽連盟作曲コンクール本選、特別演奏会、音楽教室、録音等、約50回指揮を担当する。またチェレスタ奏者としても定期演奏会他に出演。2008年、ダグラス・ボストック氏の推薦によりユングフラウ音楽祭（スイス）に参加し、国際指揮マスタークラスを受講。同年、仙台フィルハーモニー管弦楽団の公演にて山下一史氏の副指揮者を務める。
2009年、ベルナルト・ハイティンク国際指揮マスタークラス（スイス）に於いて、世界各国の応募者の中からオーディションにより数名の受講生に選ばれる。
2010年、ネーメ・ヤルヴィ国際アカデミー（エストニア）に受講生として参加。アカデミー開催期間中に行われたコンサートにネーメ・ヤルヴィ氏に選出され出演。2013年、ベルナルト・ハイティンク指揮ロンドン交響楽団の来日公演に於いてリハーサルに同行し師の元で研鑽を積む。
これまでに指揮を秋山和慶、ベルナルト・ハイティンク、ネーメ・ヤルヴィ、ダグラス・ボストック、レオニード・グリン、小林研一郎、湯浅勇治、河地良智、川本統脩の各氏に、スコアリーディングを島田玲子、西川麻里子の各氏に、ピアノを板坂真理子、中野五月、越野宏之の各氏に、ソルフェージュを宮川陸男氏に、古楽器演奏法を竹本義明氏に師事。ルツェルン・フェスティバル・ストリングス、パルヌ・シティ・オーケストラ、エストニア・ナショナル・ユース・オーケストラ、セントラル愛知交響楽団、東京佼成ウインドオーケストラ等のオーケストラ、吹奏楽団を指揮。ソリストとの共演も多く、ピアニストの春原恵子、山岸ルツ子、ミハイル・カンディンスキー、渡辺治子、斎藤龍、チェリストのマリウス・ヤルヴィ、サクソフォーン奏者の須川展也各氏等と共演し何れも好評を博している。